

巻頭言

年頭にあたって

所長 増子 昇
Noboru MASUKO

1987年の新春を迎えて皆様にご挨拶申し上げます。

生産技術研究所は、歴史と実績に支えられた内外からの高い評価、研究の中心となる教官層の実力に基づく豊かな創造力、全構成員の旺盛な志気に支えられた研究を遂行するうえでの実行力などを基盤として、「自由で創造的な研究の場」としての活動を着実に展開しております。このような場を守り育てるために必要な、さまざまな条件の一つ一つを整えていくことが所長の任務であると考えておりますが、幸い就任以来9ヶ月を大過なくすごすことができましたことは皆様の精進と努力のおかげであると感謝いたしております。

このように現在の生研は内部的には順調であります。外部的には将来の進むべき道に関して何らかの選択を迫られることになると予測されます。工学部の境界領域研究施設の時限にともなう転換措置として昨年提出された新しい学内共同利用機関としての先端科学技術センターの具体化に伴い、生研も機関としての独自性を保ちながら、重層的に協力する方策を求められることとなります。また国立学校特別会計の建て直しのために、全国の国立大学がその所有する土地の有効利用に関して文部省より協力を求められていますが、東京大学としても例外ではありません。

工学部では、学部長直属の研究組織委員会を中心として、大学院教育の将来構想に絡んだ工学系の再編に関する検討を行っています。大学院教育は生研の主要な活動の一つであり、お互いに影響するところが大きいので、まず密接な連携のもとに議論を進めることができるような態勢を作ることに致しました。幸い先端科学技術センターの設立申請を契機として、工学部とはさまざまなレベルでの従来からの交流を一層強化していく話し合いがなされております。

文部省の学術審議会では、昨年1月から約1ヶ年の予定で「工学系の共同研究体制」に関する専門小委員会を開き、共同研究の推進体制と既存の研究所との関連などに関して検討をしております。今年早々に何らかの報告が出されるものと思われ、審議会から正式に答申が出されると、われわれの研究所の立場からの対応もいずれ求められることになると存じます。

われわれとしても尾上前所長の下で将来計画委員会が作成した報告書に盛られている数々の将来構想の実現を計るためには、このような学内および学外からのさまざまな働きかけとの関連を良く検討して臨む必要があるかと存じます。いずれ新しい将来計画委員会を発足させて、細心かつ大胆な討議をお願いするつもりで、昨年12月から準備を始めております。

近づいて来る21世紀への夢を用意する学問は、もはや第二の自然と言えるまでに発展した科学技術に基礎を置くものである必要があり、それはまさにわれわれが諸先輩から受け継いできた“Industrial Science”であると存じます。われわれの社会に対する責任はこの“Industrial Science”を育て上げることによって果たさなければなりません。そのための態勢づくりを考えると、今年はその将来を考えるうえで、とりわけて大切な年にならうかと存じます。皆様のご健康とご活躍を期待致します。